

盲人伝承と龍蛇信仰―蛇女房譚を中心に―

酒向伸行

はじめに

かつて山椒太夫伝説を構成するもつとも重要なモチーフである安寿伝承を分析した際に指摘したように、盲人と龍蛇との間には密接な関係があった⁽¹⁾。盲人が管理し語ったと考えられる語り物や昔話を始めとする口承文芸に頻りに龍蛇が登場することは、柳田国男以来、民俗学の世界においては早くから注目されてきた⁽²⁾。本稿では、盲人と龍蛇との関わりを中心に彼らが語った伝承を分析し、物語に登場する龍蛇の性格を明らかにしていきたい。

最初に、盲人である瞽女が語る昔話をみることにする。新潟県長岡市で生家が瞽女宿をしていた下条登美女は、座頭を主人公とする「へびの大水」と題される次のような昔話を瞽女から聞いたという⁽³⁾。

座頭が峠の清水のほとりで休み三味線を弾いて歌っていると、池の主が女性に化けて現われ、「いい歌を聞かして

もろて、まことにありがたかった。お前さんにだけ、話すがらが、おらは、この山奥の池の主で、三日あとには、ほかの池の主のどこへ、嫁に行くがら。そのときは、この下の村中が大水になる。それで、お前さんを殺すのは気の毒だすけ、三日たたぬうちに、ほかの遠い村へ、立ちのいてもらいたい。このことは、誰にもいわんで、お前さんだけ、こっそりと立ちのいて、行ってもらいたい」と言った。しかし、座頭は、「おれ一人で助かって、村中の人が死ぬことになれば、これや、大勢の人の命に代えらんねえすけ、おれ一人で死ねばいいことだ」と思っ

て、村人にこのことを伝えてしまう。そこで村人は池に土手を築いて池の主が出ないようにした。こうして村人は助かったが、座頭は峠の清水の所で熱病を病んで死んでいた。

この話で池の主として語られる女性の正体は、語りのなか

には登場してこない。しかし、この話が「へびの大水」と題されており、また、各地に伝えられている本話の同話や類話においても蛇が女性の姿で盲人の前に現れていることから、この女性の正体が蛇であることは明らかである。そして、これらの伝承に登場する蛇（龍とされることもある）は女性の姿で盲人の前に現われ、洪水や山津波などを引き起こそうとする存在として語られるのが一般的である。

さて、このような座頭を主人公とする伝承と同一のモチーフを有する伝説が、新潟県佐渡市赤泊では瞽女を主人公として次のように語られている⁴。

羽茂の川原から蛇骨石が出る。この蛇骨石は昔羽茂の殿様が、ドンデン山の大蛇を退治した時の大蛇の骨の化石だといわれ、傷薬になると伝えている。昔、「お鹿」という瞽女が野宿していると、「三味線を弾いて唄を歌ってくれ」と依頼する女の声が聞こえてきた。お鹿がその依頼にこたえて歌ってやると、声の主はお鹿を人里まで案内してくれた。そして、「このことは誰にも話してはいけない。もし話すとお前の命はない」と告げた。この時不思議なことにお鹿の眼が見えるようになり、女を見るとそ

の姿は大蛇であった。お鹿は羽茂に泊まった時、うっかりこの話をしてしまった。すると急にお鹿は苦しみだし死んでしまった。この話を聞いた羽茂の殿様が山狩りをしてこの蛇を退治した。

このように、同じ話の主人公が座頭とも瞽女ともされていることは、座頭と盲女とがともにこのような龍蛇退治譚の語り手であったことを示している。

さて、本話は、せっかく開眼できたのに大蛇から言われた「誰にもこのことを話してはいけない」という禁を瞽女が破ったため死んだという話である。つまり、本話も盲人が龍蛇から告げられた「誰にも話してはいけない」という禁を破ったがためにその命を落としたという共通のモチーフを有していることになる。瞽女が語る龍蛇が登場する昔話のなかには、やはり龍蛇から告げられた禁を破るといふモチーフを有する昔話が存在する。一般に「蛇女房」と称されている昔話である。

一、瞽女の語る蛇女房譚

高田瞽女である杉本キクエ女（一八九八〜一九八九）は、

瞽女唄を唄うだけではなく、多くの昔話も語っていた。その中で、龍蛇と盲女との関係で注目されるのは、岩瀬博氏が彼女から採話した昔話八三話中、九話が蛇にまつわる話であったことである⁽⁵⁾。このうち「蛇女房と左甚五郎」と題された話は次のような内容である⁽⁶⁾。

ある山の頂上に大きな池があり、その池の主は女で「何としても人間さんと契りを込めてみたい」と思っていた。そして、ある大工の女房になり、子供もでき、その子は甚五郎と名付けられる。子供が三歳になった時、女は「暇貰いたい」と言い、自分が池の主の蛇であるとその正体を明かす。女は我が子が泣かないようにと、自分の目玉を一つくり抜いて男に残して去った。やがて、男の家に珍しい「蛇玉」があるという噂がたち、「殿様」に玉を取り上げられる。そのため子供が泣くようになり、困った男は山の池へ女に逢いに行った。女はもう一つの目を抜いて与えた。女は男に、盲目となったので鐘の音色で時間を知るからと、「つり鐘作つてネ、お寺へあげて呉れ」と頼んだ。その後、子供は立派な大工になった。

本話は一般の蛇女房譚にみられる産室を男が覗くという

モチーフは有していないが、蛇が両眼をくり抜いて与えるというもつとも印象的なモチーフを有している。高田瞽女だけではなく、長岡瞽女である金子セキ女(一九一三〜二〇一〇)も蛇女房譚を語っている。その梗概は次のようなものである。

蛇を助けた男のもとへ、女がやってきて夫婦になる。嫁は妊娠し男の子を生む。夫がのぞくと、嫁が大蛇だったことがわかる。嫁は助けられた蛇であったことを告げ、子どもを育てるための目の玉を一つ渡し、姿を消す。その玉のことが有名になり、玉は殿様に取り上げられてしまふ。困り果てた夫が大蛇のすむ池に行くと、片目の大蛇が現れて、もう一つの目玉を与える。盲目になった大蛇は洪水をおこし、殿様は流されて死んだ⁽⁷⁾。

これらの瞽女が語る一般に「蛇女房」と題されている昔話は、全国各地に広く伝承されている。最初に、その梗概を確認しておきたい。『日本昔話事典』の「蛇女房」の項では本話の梗概を次のようにまとめている。

ある若者が蛇を助け、やがて美しい女がやって来て若者と夫婦になる。女房は妊娠し、覗いてくれるなど部屋に

入ってお産をするが、つい夫が覗くと大蛇が赤児を産んでいる。女房は見られたことを悟り、自分は池の主で助けられた蛇であると告げ、子供を育てるための玉(片目)を置いて去る。その玉が有名になり殿様に取りあげられる。夫が池へ行くと片目の蛇が現われてもう一方の目を

与え、これで盲目になってしまい時もわからないので、寺に鐘を寄進して朝夕に撞いてくれと頼む(または、夫と子供を安全な地に逃がした後、洪水を起こして殿様に復讐する)(8)。

このように、長岡瞽女が本話を語っているだけではなく、高田瞽女も「蛇女房と左甚五郎」と題する類話を語っていることから、蛇女房譚は瞽女が好んで語った昔話であったと考えられる。広瀬千香子氏は瞽女という盲女がこの蛇女房譚を語っている点に着目し、本話における「目玉をくり抜く」というもつとも印象的なモチーフは瞽女がこの伝承に関わったことにより付加されたものではないかと推測している(9)。私も同感であるが、それでは蛇女房譚の本来の語りとはいかなるものであったのだろうか。この点を明らかにするために、蛇が残していったときれる蛇の目玉の意味をまず明らかに

したい。このモチーフが「蛇女房」と題される昔話を構成するもつとも重要なモチーフの一つであると考えるからである。

なお、蛇女房譚では蛇を龍とする語りも存在する。たとえば、兵庫県養父郡大屋町では、ナメクジに殺されそうになっていた蛇を救った若者のもとへ、「山の池」に棲む蛇が娘の姿となって現われ嫁となるが、産室の部屋を覗いて見ると「大きな竜がとぐるを巻いてうめいていた」と語られ、目玉も「竜の置いて行った目玉」と語られている(一六―一三―一四(10))。また、山梨県西八代郡市川大門町の蛇女房譚では、子を生んだのが蛇であったとしながらも、盲目となった蛇が琵琶湖の底へと消える場面で、「琵琶湖へねその龍がね、龍ちゅうか蛇のヌシつちゅうわけがねはிட்டだつて」とも語っている(二一―二〇八)。このように、龍と蛇とは語り手の意識においては同一の存在と認識されている場合が多いことから、本稿では龍蛇を一体の存在として考察を進めていくことにする。

二、龍蛇が残した玉

異界に属する龍蛇が我が子のためにと人間界の男に与えたと語られる目玉の意味について考えることにする。全国的にみると、龍蛇は自分の両目をくり抜いて残していったと語られる話が圧倒的に多い。このモチーフが本話の語りにおいて、聞き手にとつてもつとも印象的な場面であることは確かである。しかし、それとは異なる語りが各地に存在している。まず注目されるのは、龍蛇が残していった物を自らの「目玉」とはせずに、単に「玉」とする以下のような事例である。これらの事例には語りのなかに龍蛇が目をくり抜くといったモチーフもなく、ただ龍蛇が「玉」を残していったとのみ語られている。

・兵庫県川西市黒川字仲筋「二六一―二四〇―二一五」

男が産室をのぞくと、蛇は「のぞかれたからには元の川に帰る。自分はこの川の主だ。赤ちゃんが泣いたらこの玉を見せるとよい。子供は後に出世する」と言い残して川へはいる。男が育てた子は大人になって出世する。

・長崎県下県郡美津島町根緒「二四―三十一」

自分の正体が大蛇であるのを見られたので、何かの玉を婿に渡し、子供が泣けばその玉をなめさせるよう頼ん

で去った。

また、次のように、龍蛇が残した玉を「子育ての玉」とか「龍の玉」などと称している事例もある。

・愛媛県北宇和郡吉田町「二一―六十」

妻は蛇で、夫が池に行くと「子育ての玉」をくれる。

玉は殿様の家来に取られ、二つ目の玉も取られて夫は殺される。蛇は怒って悪者を殺し玉を取り返した。

・佐賀県鳥栖市村田町「三―四人」

娘は子を生んだあと、「元の家へ帰らなければならぬ」と言つて、「龍の玉」を一つ置いていく。殿様が「龍の玉」を男から取り上げる。男は島原の池のそばで娘から「龍の玉」をもう一つもらう。殿様はこの玉も取り上げる。すると、七日七晩雨が降り、雲仙の山が崩れて島ができる。娘は「龍の玉」を取り戻した。

以上のような伝承では玉が二個登場することから龍蛇の二個の目玉を意味しているようにもとれるが、一方に次のように玉の数を三個とする話がある。こうなると、龍蛇が残した玉が本来、目玉であったと理解することはできなくなる。

・島根県松江市「一八―二二三」

蛇が女に化けて現われ、人間と交わって子を生む。別れるおりに三つの玉を授け、子の泣くときになめさせよと言ひ残した。

・愛媛県宇摩郡土居町関川（現四国中央市）「二二—一六

〇」

漁師が行き暮れた女に宿を借し夫婦になる。男の子を生むが、女房の様子がおかしいので、漁に行ったふりをしてのぞいて見ると、大蛇が部屋いっぱいになり子供を遊ばせている。女房は海神で、正体を見られたので別れると玉を置いて海に帰る。子供は玉をしゃぶって成長するが、代官に知れて玉を奪われる。海辺で妻を呼ぶと二つ目の玉をくれるがそれも取られる。三つ目の玉をもらって村を逃げ、そこで親子無事に暮らした。玉は中将庵（土居町）の神宝になっている。

両話には「目をくり抜く」というモチーフは登場せず、女が渡すのはただ「玉」とされ、しかもその玉は三つとされている。すると、龍蛇が両目を与えるという話に変容してこのような「三つの玉」を与えるという話になったとは考えにくい。もしそうであるとするなら玉の数は二つとされるはずだ

からである。したがって、蛇女房譚は、本来、龍蛇は「目玉」ではなく「玉」を残したと語られていたと考えるのが自然であろう。それが盲人たちによって語り伝えられていく間に「玉」が蛇の「目玉」へと変容され、龍蛇が自らの目をくり抜き盲目となったという趣向を中心に語られるようになったのである。

さて、東北地方では、このような龍蛇が残した玉を「宝生の玉」と称する特別な玉とする事例をいくつかみることがきる。

・青森県下北郡東通村大利「二—一四六—一四八」

蛇は子には「宝生の玉」を置いていくので子は一人で飲めると言つて去る。子は「宝生の玉」を持たせると泣くこともなく育つ。

・秋田県北秋田郡阿仁町萱草「五—二二九」

蛇の姿を夫にみられた妻は「自分は実は沼の主だ」と告白して、「宝生の玉」を子供になめさせたあと去っていく。後に夫が沼に行き「子供が泣いて困るので、『宝生の玉』をくれ」と頼むが、「大切な宝物だから」とことわって去る。夫は子育てに疲れて死ぬが、子供は成長して、

しまいに神様になった。

・山形県上山市檜下〔六一二五二〕

男が山で蛇を助ける。蛇は美女の姿となって恩返しに男のもとに来て二人の子ができる。ある日、女が家で大蛇の姿となつているところを男に見られ家を出される。蛇は子供に「東の淵へ行くから困ったことがあつたらこい」と言い置く。男はそのまま重病になり、占い師が『宝生の玉』で撫でれば治る」というので、子供が蛇に相談して玉を一つもらい、父の体をこすつて治す。奉行所の役人が玉を取り上げ、「対のものだから、もう一つ出さないと皆殺しにする」と言う。子供がまた蛇に相談すると、玉は蛇自身の目玉で盲目になるが、残つた方も渡す。玉を受け取つた役人は嵐で奉行所もろとも飛ばされ、玉は東の空に昇つて二つ輝く宵の明星となつた。淵のあたりには盲蛇しかいなくなつて「座頭淵」と呼ばれ、蛇の幻に悩まされた殿様がそこに供養碑を立てた〔11〕。

この「宝生の玉」の由来については未詳であるが、少なくともこの玉は人間の願いをかなえる宝の玉とされていたこ

とは確かである〔12〕。そのような玉を龍蛇は人間に残して去つたのである。事実、龍蛇の残した玉を「宝珠」とする蛇女房譚が存在する。たとえば、埼玉県比企郡吉身町の蛇女房譚は次のような話である〔九一〇〇〇〜一〇一〕。

・武田信玄の臣、原虎胤の妻は諏訪湖の龍神の化身だつた。

子ができると妻は宝珠を残して淵に帰り、夫は吉見に移る。二代のうちは、そばの大沼に向かつて願うと膳椀などが水面に浮かんだので、そこを膳椀淵と言つた。

本話は、蛇女房譚と椀貸し淵譚とが結合している。椀貸し淵譚は淵・川・沼などが龍宮とつながつており、そこから富や幸いがもたらされると語られている例が多い。そのような椀貸し淵譚と蛇女房譚とが結びつき、龍蛇は「宝珠」を残して去つたというのである。広島県比婆郡高野町大内大野でも、娘はその正体である大蛇の姿を見られ、「見破られたからには海へ帰らねばならないが、子供をこれで育ててくれ」と言つてやはり「宝珠」を渡して去つたと語られている〔二〇一一〇〕。

ここまでみてきた事例から、蛇女房譚で龍蛇が残していったのは、「宝の玉」、つまり「宝珠」であつたとするのがその

本来の語りであったと考えることができる。目玉についても、先の山形県上山市檜下の蛇女房譚では「宝生の玉」を龍蛇の目玉だとしていた。これは、龍蛇が残したのは自らの目であるとする話が、後に一般化していくのにつれて、本来の伝承であった宝珠を逆に龍蛇の目玉であると理解するようになった結果であろう。そのように蛇の目玉そのものを宝の玉とする話は各地に残されている⁽¹³⁾。

以上みてきたように、今日の蛇女房譚では龍蛇が残したのは自らの両眼であるとする語りが一般的となつているのであるが、本来は宝珠などの「玉」を残したとする語りであった。それでは龍蛇が残したとされる「玉」とはいったい何を象徴するものなのであろうか。次に、蛇女房譚に登場する龍蛇の性格を分析することから考えていきたい。

三、龍蛇の性格

(1) 水を支配する龍蛇

特別な「玉」を龍蛇が残したとする語りのなかでもっとも注目されるのは高木敏雄の『日本伝説集』に収められた静岡県磐田郡で語られる蛇女房譚である。その梗概は次のような

ものである⁽¹⁴⁾。

坂上田村麿將軍が蝦夷征伐の途次宿った宿で結ばれた女が懐妊した。女は「何卒、わがために産屋を建て」てほしい、そして「わが産屋の中に在らん程は、如何なる事ありともゆめゆめ覗き給ふな」と告げる。しかし、將軍は誓いを忘れて産屋を覗いてしまった。すると、大蛇が赤児の頭をねぶつていた。大蛇は、「わが身はこの淵に棲む者」である、本体を見られた以上、自分の命はここまですである、亡骸はこの淵に沈めてほしいと依頼する。そして、「われに二つの宝珠あれば君に奉るべし。一つは、此児の泣くときに舐させ給へ、乳の代りとなりて育つべし。一つは、潮乾珠なれば、水に投入れたまはば、忽ち水退き、陸地とならん」と告げて息絶えた。赤児は「大蛇の授けた宝珠を乳の代りにして」育てられる。大蛇は淵の底に沈められ、椎河脇神社（浜松市南区東町）に大蛇を祀った。このあたりは一面の水であったが、將軍が大蛇の授けた潮乾珠を投込むと、忽ち水が退いて陸地が出た。

本話の内容は明らかに蛇女房譚であるが、蛇が残していつ

たのは「二つの宝珠」とされており、目をくり抜くというモチーフはみられない。さらにこの伝承で注目されるのは「二つの宝珠」が、「乳の代りに子に舐らせる宝珠」と「潮乾珠」とされていることである。潮乾珠とは、記紀神話に登場する「潮涸瓊（潮乾珠）」と「潮満瓊（潮満珠）」という山幸（彦火火出見命）が、「海神の宮」で与えられる宝珠の一つである。『日本書紀（15）』卷第二神代下によれば、山幸は「海神の女豊玉姫」と結ばれるが、産室を覗くなどという禁忌を破り覗いて見ると、「豊玉姫、方に産むときに竜に化（な）為りぬ」と姫は龍の姿となっていた。これを恥じて豊玉姫は去っていったという。

妻の正体が龍とされていること、夫が「産室を覗くな」という禁忌を破ったために妻が去ったとされていることなど、蛇女房譚と共通するモチーフはみられるが、山幸はあくまでも海神から宝珠をもらっており、このことに豊玉姫は関わっていない。この点において、蛇女房譚と記紀の山幸海幸神話とは根本的に異なっている。おそらく両者の伝承が大きく類似していたために、この地に伝えられた蛇女房譚が変容する過程において蛇が残っていた宝珠の一つが「潮乾珠」とさ

れたのであろう。

さて、「海神」が有するとされる潮涸瓊と潮満瓊は、潮の干満を自在にする呪力があるとされているが、これは海を掌るといって海神への信仰を象徴している。つまり海神は水を支配する水神なのである（16）。同様に蛇女房譚に登場する龍蛇も水を支配する水神としての性格を有している。それは残っていた玉を奪った殿様などに対する龍蛇の復讐というモチーフに典型的にみられる。

たとえば、先に紹介した長岡警女である金子セキ女の蛇女房譚では、大蛇は洪水をおこし、玉を取り上げた殿様は流されて死んだと語られていた。大分県南海郡蒲江町西の浦西でも、両目の玉を殿様に取り上げられた蛇は大洪水を起こして殿様の城を流してしまったという「三十四七」。また、徳島県海部郡海部町鞆浦では、両目を代官に取り上げられた蛇が夫に「一週間のうちに七里離れた所に逃げよ」と言うので、夫は子供を連れて逃げた。すると蛇の棲む池がでんぐり返って七里四方が泥沼になったと語られている「二一―一八三―一八四」。

このように蛇女房譚に登場する龍蛇は洪水をおこしたと

各地で語られているのであるが、特に四国から九州地方にかけては大津波を起こしたと語られている地が多い。なかでも寛政四年（一七九二）四月におこった島原地方の大地震と結びつけられた語りが存在することは注目される。たとえば、長崎県島原市で語られる蛇女房譚の梗概は次のようなものである〔二四—三〇〕。

「諏訪の池」（雲仙市小浜町）に大蛇が二匹いて畑を荒らすので、島原の殿様が蛇狩りをし、一匹を射殺したがもう一匹には痛手を負わせたが取り逃がした。ある日、島原の医者之家に「おすわ（諏訪）」という名の娘が傷の手当してもらいに来る。後に二人は夫婦となり男の子が生まれる。しかし、娘の正体が蛇であることが後にわかり、「子供が泣く時には、これを与えると泣かずに成長する」と言つて娘は玉を渡して去る。しばらくして寛政四年の大地震が起こり、眉山（島原市）が崩れ出したので眉山の麓の蛇町の人々が地震に驚き逃げようとする、大蛇が道に横たわり逃げられない。仕方なく家に帰ると大津波が起こり、付近の人家はことごとく流されてしまったが、蛇町の人はみな助かった。地震が蛇の祟りだと

いうので、島原の城主はその責を負つて自刃したという。このように、蛇女房譚に登場する龍蛇は、盲人たちによつて各地で語られていた龍蛇退治譚に登場する龍蛇と同様に、洪水や津波などをもたらす存在であった。一方で、蛇女房の龍蛇は雨をもたらす存在でもあった。兵庫県氷上郡柏原町の蛇女房譚によれば、「殿様が献上された蛇の玉を出してみると雨が降つた〔二六—二五〕』という。したがって、蛇女房譚に登場する龍蛇は、洪水や津波を起こしたり雨を降らせたりするという水を統御し支配する「水神」としての性格を強く有しているといえる。大蛇が有する「玉」が象徴する第一はそのような力であったと考えられる。そうであるがゆえに、先の静岡県磐田郡で語られる蛇女房譚のように、記紀神話に登場する海神が有するとされる宝珠を蛇女房譚の龍蛇が坂上田村麿に残したと語られることになったのである〔17〕。

ただ、蛇女房譚に登場する龍蛇は、水神とはまた異なった性格をも有していた。当然「玉」もまた別の力を象徴している。次にその点についてみることにする。

（2）龍蛇と富の獲得

龍蛇の目玉が有する意味を考える上で注目したいのは、次

の愛知県北設楽郡設楽町八橋の「蛇息子」譚である。その梗概は次のようなものである「一三一―一三八―一三九」。

子のない爺と婆が小さな蛇を子供にする。蛇は大きくなり村人に恐れられるようになり、村人は退治に行く。爺が説得に行くと、蛇は「自分を殺してくれ。自分の目を一つやるからおひつに入れておけば、米でも錢でもほしい物が出る。人には見せるな」と言って片目を与える。爺が蛇の首を打って帰ると村人は喜ぶ。しかし、目は役人に取り上げられる。爺と婆が池のふちへ行って話すと、蛇が出てきて「残りの一つの目玉をやるが、夜明けがわからぬから明け六つと暮れ六つに鐘を撞いてくれ」と言う。

本話は蛇女房譚とはまったく異なる話ではあるが、「蛇が人間に両目を与える」、「盲目になったので鐘を撞いてくれと依頼する」など蛇女房譚と共通するモチーフを有している点が目立ち、蛇の目が何でも欲しい物が入る呪宝とされている点も注目される。蛇女房譚にもこのように人間に富をもたらすという性格を有する目玉が登場するからである。たとえば、鹿児島県大島

郡喜界町の蛇女房譚は次のようなものである「二五―二〇六」。

「川嶺（喜界町）の溜め池の大蛇」が貧乏な男と夫婦になったが、妻が大蛇の姿で子供を産んでいるところを男に見られ、「これを赤子にしゃぶらせて育てるように」と、自分の片目を抜いて男に渡して去る。後に目玉を失い困っていると、池の中から大蛇が現われ、「子供の命のために残りの目玉を抜いて上げるから、子供が成長したら床に飾ってくれ」と、もう一方の目玉を男に渡す。子供が成長したので玉を床の上に飾っておくと、知らず知らず金が集まって村一番の金持ちになる。村人たちが玉を奪っていく。男が溜め池に行つて話すと、大蛇は怒つて池の水を溢れさせ下の村を流した。

蛇の目の呪力により男は富を得て村一番の金持ちになったというのである。新潟県西頸城郡名立町の蛇女房譚でも蛇を嫁にもらった「小林」という家は付近で一軒だけ栄えたという「二〇―二四九」。実は蛇女房譚では残された男が後に金持ちになったとか城主になったなどと幸せに暮らしたと語られる例が多くみられるのである。

このようにみてくると、蛇女房譚の本来の語りは、「異界から人間界を訪れた龍蛇が人間の男と結ばれて子をなしたが、男が禁忌を破ったためその正体が明らかになり、男に宝珠を残して異界へと去っていった。残された男は宝珠の呪力で富を得て裕福に暮らした」というものであったということになる。

つまり、蛇女房譚で水を統御し支配する存在であると語られていた龍蛇は、人間に富や幸いを授けてくれる存在でもありと語られているのである。それでは富や幸いを授けるために男のもとに残した宝珠とはいかなる玉であったのであろうか。

四、龍宮の如意宝珠と龍蛇

(1) 龍宮と如意宝珠

蛇女房譚に登場してくる女の正体が「池や淵の主」や「海神」とされ、その姿が龍蛇の姿で表象されていることから、女は「龍宮」と称される異界から人間界を訪れたとされていることになる。このように龍宮界と人間界との往来をモチーフとする話としては、「龍宮の贈り物」・「龍宮童子」・「龍宮

女房」などと称される一群の昔話が存在する。これらの話と同じモチーフを有しているためか、「龍宮の贈り物」などの昔話と習合した語りとなっている蛇女房譚も存在する。たとえば、徳島県三好郡西祖谷山村重末の蛇女房譚は次のように語られている「二一―一八四」。

爺が売れ残った薪を「龍宮様の御姫様」にあげると橋から川へ投げ込む。家へ帰る途中で娘に会い一緒に帰り、ともに生活するようになる。やがて娘は妊娠し、丸い物を渡して鴻池へ売りに行かせ、爺は千両を得て家を建て直した。娘との約束を破って爺が産室をのぞくと大蛇が子とともにいる。娘は「自分は龍宮界から来ていた。後に残す子を大事に育ててくれ」と言つて川へ入る。ある日、あまり子が泣くので爺は川のみちへ行き、もう一度姿を見せてくれと頼む。現われた大蛇は左の目玉を抜き子になめさせるように渡し、「前に売った玉は自分の右目だった」と言う。

ここでも大蛇が渡した玉（目玉）は千両で売れるほどの価値がある玉とされている。本話の前半は「龍宮の贈り物」・「龍宮童子」・「龍宮女房」などの龍宮訪問譚と同一のモチーフで

あり、後半が蛇女房譚となっている。また、香川県西讃岐地方では次のように語られている「二一八二」。

貧しい男が嫁をもらうと、それからはいつも米びつに米がいつぱいあるようになる。子供が生まれる時にこっそのぞくと女は大蛇となつている。子供に自分の目玉をくり抜いて山へ帰つた。

前半は「龍宮女房」などと同様の、龍宮から人間界を訪れた女が宝物を持参し二人は幸せに暮らすというモチーフである。本話はそれに蛇女房譚のモチーフが付加されている。龍宮女房譚は、竜宮から訪れた女が人間の男と結ばれ、男に富や幸せをもたらすという話であるが、先述したように蛇女房譚も本来これと同様の語りであり、龍蛇をその正体とする女が人間界の男と一緒に、女が持参した宝珠の力で男は豊かになるという話であつた。蛇女房譚に登場する女も龍宮から訪れていることから、女が持参した宝珠は龍宮に存在する宝であつたと考えられる。

ところで、龍宮には「如意宝珠」と称される玉が存在すると古くから信じられてきた。蛇女房譚で、龍宮から人間界を訪れた女が残したのはこの如意宝珠であつたと考えられる。

如意宝珠は仏教經典などに登場し、「如意宝」、「如意珠」などとも称される、一切の願いが所持者の意のままになうという不思議な宝珠のことである⁽¹⁸⁾。時代を遡ってみると、東寺観智院本『三宝絵⁽¹⁹⁾』上—四「精進波羅密」条に、波羅奈国^{こく}の「大施太子^{だいせたいし}」が、苦難の旅を続け、大海の水を汲み干そうとまでして、貧しい人々を救うため「如意珠^{にょいしゆ}」を手に入れたという本生譚が収められている。それによれば、「我レ聞ク、海^うミノ中ニ如意珠有ナリ。心見ニ行テ求ム。」とあり、さらに、この珠は「竜王ノ宮^{りゆうわうみや}」にあることがわかり、「王ノ宮^{わうみや}ニ至テ見レバ、毒ノ竜堀キヲ守リ、玉ノ女門ヲ守^{をむかへ}」つていた。そして、太子は竜王に対して「王ノ左ノ耳ノ中ノ珠ヲ乞ハムガ為ニ来レル也^{ためきた}」と語っている。このように、十世紀末までには如意宝珠の存在は貴族社会において広く知られており、「海ミノ中ニ如意珠有ナリ」というのであるから如意宝珠は海中に、それも「竜王の宮」、すなわち龍宮の龍王がこれを所持しているとされていた。この大施太子の話は、平康頼の『宝物集⁽²⁰⁾』巻第一にも次のように登場してくる。

大施太子は、「一切衆生に宝をあたへん」と云大願有て、施をほどこし給ふに、宝は尽くれども衆生のねがひは尽

ず。故に、命を捨て龍宮城へ行って、如意宝珠をえて帰給ふ事也。(略) 一をもつて、花巖経には、「一切の宝の中に如意宝珠勝れたり」ととき、妙楽大師は「如意珠天上勝宝」とは積し給ふ也。如意珠などをえてんには、五穀七宝、いづれかともしきはあらん。

このように、いかなる宝でも自由に出せるとされた如意宝珠はやはり「龍宮城」にあると信じられていたのである(21)。

さらに、『今昔物語集』巻第一六一「仕観音人行 竜宮得富語第一五」は次のような話である。

観音に深く帰依する若者が、如意造りの職人にとらえられた小蛇(その正体は竜王の娘)を救ったお礼に池の底にある竜宮に案内され、帰りに娘を救ってもらった礼として竜王からもらったいくら割つても尽きない「金ノ餅」の力によって生涯富み栄えた。ただし、最初、竜王は「如意ノ珠ヲモ可奉ケレドモ、日本ハ人ノ心悪シクシテ、持チ給ハム事難シ」と、「如意宝珠」を与えようとしていたとされている。やはり龍宮にあるもつとも貴重な宝は如意宝珠と称される玉だったのである。

(2) 「さよひめ」と如意宝珠

室町時代においても、龍宮にあるとされる如意宝珠に対する信仰は存在した。たとえば、東北地方で活動していたボサマと称される盲僧によって語られた奥浄瑠璃のなかの一曲である『竹生島の本地』系の曲の成立に大きな影響を与えた室町時代に流布した「さよひめ」の物語にも「如意宝珠」が登場してくる。奈良絵本『さよひめ(22)』の梗概は次のようなものである(23)。

大和坪坂の「まつら長しや」(松浦長者)には子供がないので長谷観音に祈って「さよ姫」を授かった。やがて父が亡くなり家は没落し、さよ姫は母と二人貧しい生活をしてきた。そしてさよ姫十六歳の時に、父の十三回忌の費用を得るために母に内緒で「むつの国あたりのこほり」(陸奥国安達郡)の「こんかの太夫」に身を売ってしまふ。さよ姫は安達郡の池に棲む大蛇の人身御供として、太夫の娘の身代わりに捧げられる。しかし、さよ姫が出現した大蛇に『法華経』の提婆達多品を誦みかけると、大蛇の角は取れ鱗も落ち十七、八の娘姿になり、蛇身の苦患から救われる。この大蛇の前世は、人買いにさらわれ人柱にされた伊勢国二見ヶ浦の女性であった。大蛇は

龍宮の如意宝珠を成仏できた礼としてさよ姫に差し出す。その後、大蛇は天に昇り、坪坂の観音として祀られた。大蛇の力で故郷に帰ったさよ姫は娘と別れた悲しみで目を泣きつぶした母と再会し、大蛇にもらった如意宝珠をあてて母の目を開ける。さよ姫親子はふたたび長者となる。後にさよ姫は竹生島の弁才天に祀られた。

ここで生贄を求めているのは「大しや」（大蛇）と記述されているが、「十二のつ」を有し、「口よりくわゑんのかきをはき」という姿はまさに龍である。さらに、この大蛇は『法華経』提婆達多品の功德によって成仏したとされているが、『法華経』について『さよひめ』の本文には「そのほけきやう、一ふ八くわんのうち、五のまき、たいはほんと申は、女人しやう仏の。八さいのりうによまてうかみたりし御きようなり」と記されている。確かに、『法華経』²⁴ 卷第五「提婆達多品第十二」には、八大龍王の一つである沙羯羅龍王の八歳になる娘が、持っていた「価値は三千大千世界なり」というほどの価値ある宝珠を釈尊に差し上げ、釈尊がこれを受け取ると同時に龍女は「忽然の間に變じて男子と成り」成仏したという龍女成仏譚が説かれている。このことから『さ

よひめ』に登場する大蛇もまた、まさに龍女であるといつてよい。さて、成仏した大蛇はさよ姫に礼をするのであるが、その場面に次のようにある。

此御きようの、ふせもつに、これを參らせ候はん、これこそ、りうくうしやうの、たい一のたから、によいほうしゆにて候なり、此玉と申は、何事にも候へ、のそみのかなふ、宝也とて、さよ姫に奉り、

やはり、如意宝珠は「りうくうしやう」（龍宮城）、つまり龍宮にある、どのような望みでもかなう第一の宝だということである。さらに、母の開眼の場面には次のようにある。

かの大しやの、あたへつる、によいほうしゆを、とり出し、はうへのりようかんにをしあて給へは、たちまちにひらけつゝ、おや子のたいめん、ありけるは、ためしすくなき、したい也。

このように、如意宝珠の力によってさよひめの願いはかない、母の眼は開くのである。母と子が人買いに売られ離れ離れになった後に再会し、子が母の眼を開眼させるといふモチーフ、さらにはこの場面の語りは山椒太夫伝説の原型となつたと考えられる安寿伝承と酷似している。安寿伝承の管理者

は越後瞽女や、津軽イタコといった盲女であったことから（25）、「さよ姫」系伝承の成立にも盲女が深く関わっていたと考えられる。このように、中世末に語られた龍蛇を巡る物語群のなかには、盲人それも盲女によって管理されていた物語が存在したのである。

なお、『さよ姫』ではこの母の開眼の場面の後に、「かのほうしゆより、たからをふらせ」、「ふたゝひ、ちやうしやとさかへ給ふ」とある。如意宝珠から宝を降らせ、「さよ姫」と母とは再び長者となったというのである。ボサマが語る奥浄瑠璃の写本のうち、『竹生嶋弁才天由来記』でも、「佐世姫」は蛇からもらった玉で母の眼を開き、この玉を虚空を拝して振ると消えていた宝物が湧き出し再び栄華に暮らすようになったと語られている（26）。やはり龍宮の龍蛇が所有する如意宝珠は人間の願いをかなえ、富や幸いをもたらす宝と信じられていたのである。

おわりに

以上述べてきたように、蛇女房譚は盲人によって管理された話であった。そして、本話の本来の語りは異界（龍宮）に

棲む龍女と人間界の男とが結ばれ子供も産まれるが、その正体が露見したため、龍女は龍宮にあるいかなる願いでもかなうとされる如意宝珠という玉を残して異界へと去ったというものであった。それが盲人によって語り伝えられていく間に、残していく子を育てるために自らの目玉をくり抜いて残していったという語りへと変容していったのである。

ところで、盲人が語る蛇女房譚に登場する龍蛇は、一方で水を支配する神であり、もう一方で人間に富や幸いをもたらす神でもあった。仏教世界において、これと同様の信仰を集めているのが弁才天である。村々の池や川のほとりでもっともよく目にするのは弁才天を祀る祠や碑であり、弁才天は水神として信仰されている。一方、七福神の一員とされていることに典型的に示されているように弁才天は福神としても広く信仰されている。また、弁才天は一般的に美女の姿で表わされることが多いのであるが、龍蛇の姿で表象されることも多い。たとえば、弁才天の縁日が「巳の日」とされていることからわかるように弁才天は蛇の姿で表象されることが多い。かつて養蚕地帯において、弁才天は蚕神として信仰されていた。越後の長岡瞽女である関根ヤス女は「弁天様は、

(略) 蛇のまあ、親方でいらっしやる」といい、「弁天様を信心すれば蚕が良うなるという人もある。弁天様は蛇らんだ」と、弁才天は蛇であつて、そのために蚕を育てる家はこの弁才天を信仰していると語っている⁽²⁷⁾。このように弁才天が蚕神として信仰された理由としては、一般に弁才天の使いの蛇が蚕に害を及ぼすねずみを食べるためであるとされている⁽²⁸⁾。また、山形県米沢市の築沢弁天についても、「築沢弁天のお姿は蛇体で、付近の養蚕農家はオブク(護符)をいただいできて一升米にオブクをのせて蚕棚にあげておく。弁天様のお姿を借りてきているから鼠がこない⁽²⁹⁾」という。このように、弁才天の本体は蛇であるとか、弁才天の使いは蛇であるなどと伝えられてきたのである。

時代を遡ると、『平家物語⁽³⁰⁾』(覚一本)巻七「竹生島詣」では竹生島の弁才天が龍の姿で平経正の前に示現しており、『太平記⁽³¹⁾』巻第五「時政参籠榎嶋一事」によれば、北条時政が榎嶋(江の島)に参籠し「子孫ノ繁昌」を祈願していた夜に端厳美麗な女房が顕れ、「子孫永ク日本ノ主ト成テ、栄花ニ可レ誇。但其挙動違所アラバ、七代ヲ不レ可レ過」と告げて帰っていった。その後姿を見ていると、「忽ニ伏長二十

丈許ノ大蛇ト成テ」、海中に入つていった、あとには大きな鱗が三枚落ちていたという。江の島の弁才天が美女と大蛇の姿で示現したというのである。さらに、厳島明神の本地は弁才天とされているが、厳島明神は大蛇の姿とされ⁽³²⁾、「沙羯羅龍王の娘」とも伝えられているのである⁽³³⁾。

以上のような弁才天信仰の伝播にも盲人は深く関わっていた。座頭も瞽女もともに「妙音講」で弁才天を祀っていることはよく知られている。この妙音講が盲人内だけの儀礼ではなく、近在の村々の信仰としても定着している事例がある。先にみたように養蚕地帯においては弁才天が蚕神として信仰されており、長岡瞽女は妙音講で弁財天にあげて供養した箸を世話になる瞽女宿に土産として持参した。この箸を使うと蚕が丈夫に育つかよい繭になると信じられていた⁽³⁴⁾。長野県で最近まで活動していた飯田瞽女の妙音講でも弁才天を祀っているが、この日、在の人が蚕の春子の種を持ってきて弁天様に供える。これを瞽女が押んでくれるという⁽³⁵⁾。

一方、座頭の催す妙音講が村の儀礼ともなっていた事例がある。近世の淡路では、「亥の子」の日に、淡路一国の座頭が全員当番の家に集まり「弁才天」の画像を掛けて琵琶・琴・

三味線の歌曲などを奉納した。この淡路の「妙音講」で特徴的なのは座頭のみで執行されるのではなく、当番の村の村役人が座頭を饗応し、近隣の寺々の僧による読経や、相撲興行もあつたという点である。このように、近世末の淡路島で座頭が催す妙音講は各村で行なわれる「亥の子」行事と完全に習合していたのである。そしてもっとも注目されるのは、この淡路島の妙音講で掛けられる弁才天の画像は毎年順番に輪番制で座頭の間を回り、これを守る当番に当たった座頭在所の村は、その年、村方は五穀がよくみのり、浦方は大漁になると信じられていたことである⁽³⁶⁾。つまり、村人は弁才天を五穀豊穡や豊漁をもたらす福神として信仰していたのである。

以上のように、盲人によって管理された蛇女房譚などの龍蛇伝承に登場する龍蛇と、盲人がその信仰の伝播に深く関わった弁才天への信仰とは、まったく同一の性格を有しているのである。今後、龍蛇信仰と弁才天信仰との関係、さらには、そこに盲人がどのように関わることになったのかを考えていきたい⁽³⁷⁾。

【註】

(1) 酒向伸行『山椒太夫伝説の研究—安寿・厨子王伝承から説経節・森鷗外まで—』(名著出版、一九九二年)第三章二節—二「盲人と蛇」。

(2) 盲人と龍蛇との関係については、柳田国男が早くに「米倉法師」(『桃太郎の誕生』所収)や『一目小僧その他』で注目している。

(3) 水沢健一『瞽女のごめんなんしよ昔』(講談社、一九七六年)、一二三—一二五頁。

(4) 小山直嗣『越佐の伝説』(野島出版、一九六七年)、三一—五—三一七頁。

(5) 岩瀬博『瞽女の語る昔話』(昔話研究資料叢書別巻三、三弥井書店、一九七五年)、五三頁。「蛇婿入り(姥皮)」、「蛇骨報恩」、「蛇婿入(苧環型)」、「蛇神教化」、「蛇の仕返し」、「犬娘と蛇息子」、「スズメとケラツツキと蛇と蛙」、「蛇女房と左甚五郎」、「婆ちゃん池の蛇」の九話である。

(6) 前掲註(5) 岩瀬博『瞽女の語る昔話』、二二九—二四九頁。

(7) 廣瀬千香子「瞽女サの語る『蛇女房』における『失明』

の意味づけ」『昔話伝説研究』三七、昔話伝説研究会、二〇一八年三月、一一二頁。

(8) 稲田浩二他編『日本昔話事典』(弘文堂、一九七二年)「蛇女房」項。なお、本項を執筆した黄地百合子氏は「本話型の分布には盲人、座頭が参与したのではないか」と、盲人の関与を想定している。

(9) 前掲註(7) 廣瀬千香子「瞽女サの語る『蛇女房』における『失明』の意味づけ」。

(10) 本稿では、特に注記する場合以外の昔話資料は『日本昔話通観』(同朋社)に収録されたものを参照し、「」内に巻数と頁数を示した。つまり「十六―二一三―二一四」は第一六巻の一―三―一―四頁を示している。

(11) 本話で蛇の棲む淵が「座頭淵」と称されていることは、本話の語りに盲人が深く関わっていたことを示している。

(12) 「宝生の玉」を宝物とする伝承などから「宝生の玉」の「宝生」とは財福を授ける仏としても信仰されている。「宝生如来」(宝生仏)を指していると考えられる。

(13) たとえば、新潟県長岡市西蔵王町では、「蛇がくれた両目が高く売れ赤子に乳を与えた」「二〇―二四七―二四八」、

同中蒲原郡村松町安出では、「蛇は金の玉をくれ、子供は玉をおもちゃにして泣かずに育つ。殿様に取り上げられ、二つ目ももらう。蛇は『これは自分の目の玉で二つともなくなつて何も見えなくなるので、明けと暮れと鐘をついてくれ』と言う」「二〇―二四八―二四九」、同中蒲原郡村松町下戸倉では、「蛇が『目玉を売って寺に奉納してくれ』と頼む。一つでは売れず、両目を千両で売り夫は鐘を三井寺に奉納して朝昼晩に鐘を撞いてもらう」「二〇―二四八」、広島県甲奴郡上下町(現府中市上下町)では、「明神池の水神さんのお使い(途中では池の主とも)を正体とする大蛇が『この目は金の玉に見えるけえ、この金の玉を持つとりやあ、この子は絶対泣かんけえのう』と子の父に渡す。しかし、この玉は近所の子供たちに取られてしまう。そこで大蛇はもうひとつの目を渡した」「二〇―二〇七―二二二」、香川県香川郡直島町積浦では、「大蛇は金の玉を残し、『子供にねぶらして遊ばせてくれ』と頼んで去る。お殿さんがこの玉を取り上げる。池へ行つて相談しよう一つもらうが、これも奪われる。蛇は『あれは私の目の玉だった。二つともとられたので私は盲になった』という」「二一―一八二」と

語られている。

(14) 高木敏雄『日本伝説集』(宝文館出版、一九七三年)、一四五〜一四七頁。

(15) ここでは、坂本太郎他校注『日本書紀』一(岩波書店、一九九四年)に拠った。

(16) 田中久夫氏は、『古事記』の海幸山幸神話の記述をふまえて、「海神は水神であり、農耕の神でもあった」と指摘している(『日本人と他界』(田中久夫『氏神信仰と祖先祭祀』名著出版、一九九一年、所収)。

(17) 廣瀬千香子氏は、蛇の目玉はもともと記紀神話に登場する「潮涸瓊」と「潮満瓊」であったとし、それが静岡県磐田郡の坂上田村麿伝説にみられる「子供に舐らせる玉」と「潮乾珠」に変容し、更に瞽女の伝承が関わるようになって「子供に舐らせる一つ目の目玉」と「殿様に取られてさうらに求めに応じて与えられた二つ目の目玉」とに変容したと論じている(前掲註(7) 廣瀬千香子「瞽女サの語る『蛇女房』における『失明』の意味づけ」、一二九頁)。

(18) 『大智度論』(新修大正大藏經 二五) 五十九には「此宝珠名如意。(中略) 是宝常能出一切宝物、衣服飲食、随意所

欲、尽能与之亦能除諸衰惱病苦等。」とある。

(19) ここでは新日本古典文学大系本に拠った。

(20) ここでは新日本古典文学大系本に拠った。ここで引用した本文は文治四年(一一八八)以前には完成していたと考えられている七卷本系の本文である。

(21) 『百練抄』(国史大系) 延久三年(一一〇七)十月二十六日条に、「今日有夢想。朱常林降雨時、前相国被献如意宝珠、其形如鷄卵。頗大。」とあることから如意宝珠が実在すると認識されていたことがわかる。

(22) ここでは『室町時代物語集』第四(大岡山書店、一九四〇年)に収録された奈良絵本『さよひめ』に拠った。

(23) ここでは徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版、二〇〇二年)の「さよひめ」項の梗概を参照し、これに適宜補足した。

(24) ここでは岩波文庫本に拠った。

(25) 前掲註(1) 酒向伸行『山椒太夫伝説の研究―安寿・厨子王伝承から説経節・森鷗外まで―』

(26) 成田守『奥浄瑠璃の研究』(桜楓社、一九八五年)、二二三頁。

(27) 鈴木昭英「関根ヤス聞き書き」(同『瞽女 信仰と芸能』、高志書院、一九九六年、所収)。

(28) 前掲註(27) 鈴木昭英『瞽女 信仰と芸能』、一〇二頁。

(29) 佐久間淳一『瞽女の民俗』(岩崎美術社、一九八三年)、一九四頁。

(30) ここでは新日本古典文学大系本に拠った。

(31) ここでは日本古典文学大系本に拠った。

(32) 『臥雲日件録跋尤』文安四年(一四四七)四月一七日条。

(33) 『平家物語』(寛一本)巻第二「卒塔婆流」では、「厳島の大明神」の「宮人」は「是はよな、沙羯羅龍王の第三の姫宮、胎藏界の垂迹也」と語っている。
タイザウカイ スイザクナリ

(34) 五十嵐富夫『瞽女―旅芸人の記録―』(桜楓社、一九八七年)、一一四頁。および、前掲註(29) 佐久間淳一『瞽女の民俗』、一八七頁)。また、長岡系四郎丸組の土田ミス女も「妙音講には弁天様の前に白箸の束を三味線糸で結んで供え、それを上州の養蚕家の土産に持参していた」という(佐久間淳一『瞽女の民俗』、同頁)。

(35) 前掲註(27) 鈴木昭英『瞽女 信仰と芸能』、一一八頁
〜一二五頁。

(36) 『淡路国風俗問状答』「十月亥の子の事」条(『日本庶民生活史料集成』(三一書房)第九巻、所収)。

(37) 「弁才天」の異名である「妙音天」や「妙音菩薩」に対する盲人の信仰については、酒向伸行「盲人伝承と『妙音講』―妙音菩薩信仰を中心に―」(『御影史学論集』四三、御影史学研究会、二〇一八年一〇月)で論じているので参照されたい。

【付記】本稿は二〇一八年十一月二十五日に開催された御影史学研究会十一月例会で報告したものに手を加えたものである。報告後、多くの皆様からご教示を賜った。この場を借りて御礼を申し上げたい。

みかげ民俗 七号（二〇一五年八月）

端午の節供と即位式と武者飾りのこと

田中 久夫

狐霊信仰の性格

— 『今昔物語集』の世界を中心に —

酒向 伸行

祭りの日に悪態をつく理由

— 祭りの中の争う要素の比較から —

世森かん奈

みかげ民俗 八号（二〇一五年十二月）

豊前の飛鉢説話

— 門司関と草野津との関わりの中で —

嶺岡 美見

『金峰山秘密伝』に見る十三世紀末の天川弁才天

— 役行者伝承と宇賀弁才天信仰をめぐって —

藪 元晶

六甲修験と雨乞いの翁面

古代の大型船と安芸国と賀茂神と

早栗佐知子
田中 久夫

みかげ民俗 九号（二〇一六年七月）

賀茂の神と水上輸送のこと

— 尼崎の長渚御厨と高槻の御島鴨社（河野氏）を中心に —

田中 久夫

酒糟による原皮の毛抜き（脱毛）と裏漉き実務及び毛抜き

（脱毛）実験

永瀬 康博

大阪府貝塚市脇浜浦の八大龍王が和泉葛城山へ勧請された理由

植野加代子

〔書籍紹介〕

酒井卯作編『柳田国男南島旅行記』

田中 久夫